

歩兵第十六聯隊と満州事変

元新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

昭和六年二月二十二日、聯隊は第二次南満州駐割を下令され、四月九日新発田兵營を出発、大阪～大連を経て、駐割地の遼陽兵營に入った。

大正末期の軍備整理のため聯隊の平時編成は、第四・第八・第十二中隊は欠隊で九個中隊編成となり、今次の駐満は第二・第三大隊の六個中隊に過ぎない少ないものだった。尚、第一大隊は建制のまま新発田兵營に残留していた。

(※第一次南満州警備は大正二年四月から四年五月までの二年間勤務)

大營の攻撃

昭和六年九月十八日夜半、出動命令を受けた聯隊長（浜本大佐）は次の命令を下し遼陽を出発、十九日未明、奉天駅に到着した。

聯隊命令（九月十九日午前0時五十分）

「昨十八日午後十時三十分頃奉天北方、北大營西北付近ニ於テ支那正規兵ノ一隊ハ、我が満鉄線ヲ爆破シ我が分遣隊ニ向ケ攻撃セリ而して今分遣隊及歩二九（在奉天）ハコレト交戦中ナリ。聯隊ハ臨時編成ヲ命ゼラル。ナルベク速ヤカニ準備ヲ完了シコレヲ救援セントス」

聯隊は直ちに師団命令により東大營の攻撃に向かった。時既に、奉天城は歩兵第二十九聯隊（会津若松）によって攻略せられ、聯隊は城壁南側に沿って前進、途中城東の航空廠・兵工廠及び飛行場を殆んど抵抗受けることなく占領（航空機六十機・戦車十二両を鹵獲）した。

午後一時頃、東大營に到着したが敵影なく、夕刻まで付近を掃蕩し、同夜以降主として商埠地の警備に任じ、二十三日、歩兵第三十九旅団と交替し奉天に向け出発、長春に一泊の後、九月二十五日吉林に到着、天野第十五旅団長の隷下に入った。その後約一ヶ月吉林付近の警備に任じた。

大興・嫩江付近の戦闘

事変勃発と共に、黒竜江省軍は嫩江の鉄道橋を破壊、チチハルから洮南を経て四平街に通ずる鉄道は不通となり、輸送が途絶した。

関東軍は外交機関を通じて復旧に努めたが進展をみず、遂に満鉄をして修復することと

し、作業援護ため第十六聯隊長指揮する歩兵一個大隊・工兵一個中隊を基幹とする嫩江支隊を編成し、嫩江北岸、大興付近に急派することとなった。

吉林警備中であった聯隊は、本部と第二大隊・機関銃中隊を以って十一月一日午前六時吉林を出発、長春に於いて野砲兵第二聯隊の一個中隊及び工兵一個中隊、その後、鄭家屯で野砲兵第一大隊の主力、工兵小隊と合し、列車にて泰来駅に午後八時到着した。

十一月二日夜、偵察の結果、大興駅を中心に正面約四キロメートルに亘り陣地構築がされており、更に増強中であった。嫩江北側は約十キロメートルに亘り、一面湿地帯で五本の河川が分かれ、そこに架かる橋は徒歩連絡可能な程度に橋桁が破壊されていた。

橋梁修復に関する外交交渉では敵方の了解するところとなり、対敵行為は行わないとの確約を得たとのことで、四日午前二時、泰来駅を出発し、同五時、江橋駅に下車、午前七時、架橋援護として第七中隊（機関銃一個小隊）は日本軍たることを標示し、日の丸を先頭に鉄道上を北進した。

正午過ぎ、大興駅南方約一キロメートルに達したとき、川岸台上陣地から一斉に機関銃、迫撃砲の射撃を受け、十数名の負傷者を出した。中隊は一時機関銃の射程外に在る第五橋梁付近まで退避、列車内に待機していた支隊主力は銃砲声により戦闘の発生を知り、直ちに緊急集合して続々川岸に到着した。敵は大興東側に山砲二門を有し橋梁付近に砲火を集中して来た。

午後二時、支隊は第五橋梁付近に終結、砲兵は嫩江南岸に砲列を布置し敵砲兵の制圧に当たったが距離遠く、僅かにレールばかり残っている橋上を人力で一門ずつ搬送するに至った。聯隊は将校斥候の報告により、明日払暁より敵陣地左翼拠点の左側背から攻撃するに決し、五中隊を先遣隊として薄暮に乗り拠点前の高地の占領を命じた。

先遣隊は日没後、敵陣地に突入し格闘数合所要の地点を占領した。砲兵も一門ずつ人力で第四橋梁まで推進し、直接攻撃を支援できる態勢を整えた。

通信中継点を第五橋梁とし、通信班六名、工兵半小隊、軍参謀石原莞爾中佐を残し、暗夜に乗り湿地帯を跋涉して、五日午前四時頃、転進を開始し、午前六時頃、先遣隊の占領している高地の南側に集結した。

五日午前八時、第二大隊（第七中隊欠）を第一線、第七中隊を予備隊として、敵陣地の左側背に向かって攻撃を開始した。左第一線の五中隊は、掩蓋機関銃を有する敵の正面に向かった為攻撃は進捗せず、右翼六中隊は、敵陣地左側背の高地を占領し引き続き攻撃を続行、その頃からは、敵兵力をその左翼に延伸し応戦したため戦線は膠着、この時第七中隊は独断第六中隊の右翼に展開、敵の左翼を包囲するように攻撃を開始したため、第六中

隊は遂次前進するに至った。

この頃に至り第一線は弾薬欠乏し、歩兵砲は弾丸を撃ちつくし、砲手は小銃を取って応戦する状態で、掩蓋機関銃を制圧する術なく戦線は膠着し、死傷また続出するに至った。

午前十一時過ぎ、右前方三千メートル付近に乗馬部隊らしき集団を望見したかと思える間もなく、第七中隊の右側背に三々五々敵兵出現し、正午頃、我が側背は全く包囲された。

聯隊本部は、腹背から敵の射撃を受けるに至った。充当すべき予備の兵力は一兵も無く、僅かに本部の書記、伝令等が負傷者の銃を取って円陣をつくり、応戦するに過ぎなかった。そのうち、第七中隊長、稲葉少尉負傷の悲報が伝えられ、第一線の負傷者も本部付近に収容されて来た。戦線は動揺し、前線から後退するものが出てきた。

聯隊副官石川少佐は、十字火の中に不動明王のように立ち上り後退する者を叱咤し、「軍旗はここにあるぞ！」と大声叱呼した。後退していた兵が吸いつけられるように皆本部へ集まってきた。

この間、敵の包囲は更に延伸され、本部を中心に第六・第七中隊が半円形に戦線を整理し、銃剣と鉄帽を以って個々の掩体を作り、徐々に一連の壕に掘り、各人は最後のためにと弾薬盒に五発の弾丸を残し陽の沈むのを待っていた。

五日午後三時、石原参謀から明早朝第三大隊が到着し隷下にはいること、引き続き歩兵第二十九聯隊の一個大隊が到着することが電話で伝えられた。尚、支隊は極力現在地を確保すべしとの軍命令も伝えられた。

夜になっても敵の射撃は止まず、本部に収容された負傷者も二・三十名に及び、呻吟していて悲惨な一夜となった。この状況は石原参謀から軍に報告され、歩兵第十六聯隊全滅と内地の新聞に報道されたこともあった。又、新聞には軍旗を焼く準備をしたとか、穴を掘って埋めることを命じたとか伝えられたが、すべて虚報である。

浜本聯隊長は最悪の場合を考え、軍旗の処置について、伝令の兵長を呼んで「ここに居る将校は皆ここで戦死することになるかも知れないが、そのとき、お前はこの軍旗を持ってあの高地までさがれ。あそこには第五中隊がいる」とひそかに語った。

又、五日数度に亘る飛行機偵察によれば、午前の戦況は順調であったが、午後には戦線も本部らしい位置も全く認めず、或いは潰乱したのではないか、真にお気の毒だが、今まで得た情報としてはこれが真相ですとの報告が上がっていた。

第三大隊は四日夜九時頃、電話にて次の師団命令を受けた。「浜本支隊は本四日午後、江

橋付近に於いて黒龍江省軍と戦闘を惹起したるが如きも交信不良にして詳細不明なり。第三大隊は成るべく速やかに江橋に向かい前進すべし。何時頃出発し得るか、一刻も早く」との緊急電話であった。

大隊は、五日正午過ぎ長春出発、四平街を経て五日夜十時泰来着、飛行場援護として派遣中の第九中隊を合し、夜半過ぎ江橋着、直ちに下車し戦場に向かい前進した。途中工兵中隊長より「戦線には既に弾薬なし」と聞き、弾薬五十箱を交互に坦送し湿地を渡り本部目指し前進した。

六日払暁に垂らんとすれど、本部の位置発見し得ず。時に右側三・四百メートルの高所より突如射撃を受けた。大隊は直ちに第十一中隊をして対処させた。間髪いれず百名を下らぬ敵騎兵は、第二大隊の右翼と覚しき方向に向かい砂塵を巻いて襲撃して来た（後に聯隊本部の位置であることを知る）距離四千五百メートル、大隊長は先ず機関銃中隊にこれを猛射せしめた。

嗚呼何と壯観だったか、落馬するあり、空馬驚奔逃避するあり、又、半輪（後退）するありと敵を潰乱せしめた。この頃に至るも聯隊命令は入手せず、大隊長は独断右より第十一・第十中隊を以って攻撃前進に移った。前面には概設の陣地は殆んど無く、大なる抵抗を受けることなく前面の高地に達した。

六日午前八時頃、最左翼歩兵第二十九聯隊第一大隊方向の戦況も活発となり、鉄道路線から続々敵の北走するのが見えた。聯隊は弾薬補充を急速に行い、全線勇躍追撃に移り、正午頃、大興北側地区に進出し同地を確保した。

大興付近の敵は、関という団長の指揮する一個団と騎兵一個旅団の兵力であった。聯隊は、この戦闘で将校以下四十四名の戦死者を出した。

聯隊の大興進出により、黒龍江省軍は我が軍のチチハル進出を阻止しようとして、昂昂溪南方十キロ、三間房を中心に正面十数キロメートルに亘り陣地を構築し、兵力を増強していた。師団は全力を持ってこれを攻撃することとなり、鉄道輸送により大興北側地区に集結した。十一月十八日、師団は中央突破の作戦で攻撃を開始。聯隊は師団の予備として追撃隊を命ぜられた。

午前九時十五分、敵は左翼方面より遂次北方に退却を開始し、正午、敵線は遂に崩壊に陥り、師団は直に追撃に移った。聯隊は第三大隊を前衛として線路東側地区を進撃行動に移った。風速十メートルの西北の季節風は雪を交え、行動頗る難渋した。

遙か北方チチハルの灯りを目標に凍る暗夜を黙々と追撃を続行し、午前六時、敵の抵抗を受けることなくチチハル駅に突入した。駅員尋問の結果、敵は午前三時頃、列車で克山

方面に逃避したとのことであった。この時他の追撃隊は未だチチハル南方地区を北進中であるを知り、とにかく一番のりであったことを喜んだ。

十九日師団司令部はチチハルに入城、聯隊は二十五日まで警備に任じ、二十八日同地を出発、二ヶ月ぶりの十一月三十日午前中に駐割地、遼陽に帰還した。その後も、錦州攻略、ハルピン攻撃、匪徒の掃蕩及びチチハルの警備に任じた。

十月五日聯隊は、新警備地、山城鎮に駐営した。当時瀋海沿線全て、駅・橋梁を破壊されたため、警備の傍ら復旧のため鉄道修理の援護に任じた。二十二日には早くも全線復旧開通を見た。

十一月九日、沙河口分遣隊（第十二中隊曹長以下十三名）は西方に掠奪中の兵匪あるとの報により、これが討伐に向かい、同曹長以下戦死二名、負傷四名を出したことが本警備中唯一の遺憾事であった。

突然、内地帰還の命に接し、歩兵第四十五聯隊（鹿兒島）と二十日交代、二十二日、原駐地に帰った。愈々帰還準備に忙殺されたが、昭和七年十二月三十日午前九時、遼陽神社に参拝し列車に分乗、市民歓送の裡に万感を胸につつみ遼陽を発車。

八年元旦午後、釜山着、宇品丸にて出港、五日宇品に上陸、同夜広島市内民家に一泊。

六日、第三大隊は第一列車で午前五時発、聯隊主力は第二列車にて午前九時、広島を発し一路新発田に向かった。宇品上陸後は沿線到るところ歓迎歓送に埋められ、一年九ヶ月の過去を偲んだ。

七日朝、我が県内に入り、午後二時及び五時、夫々衛戍地に帰還した。

（「新発田聯隊史」より）